
とあるフェブルア祭と神の文書

パラドックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるフェブルア祭と神の文書

【Nコード】

N3502L

【作者名】

パラドックス

【あらすじ】

とある世界。その世界である一人の考古学者が命を落とした。それは大理石の床に頭蓋骨を割るほどに自ら打ち付けたという、自殺。その事件の後からその世界と、『学園都市』と呼ばれる超能力者を作り出す巨大な街が存在するもう一つの世界で様々な事件が起こります。一体その連続する事件の真相とは何なのか。その謎に超能力者達、上条当麻、御坂美琴、一方通行が挑む。（ここで出たように上条当麻、御坂美琴、一方通行がメインで進みます。とある魔術の禁書目録ととある科学の超電磁砲の二次創作ちなみに超能力も魔術

もどちらもかなり出ます。ただし、魔術は出ますが魔術サイドの方々はあまり出ないと思います。(題名を少し変えました。そのほかあらすじの一部を変更。

プロローグ Murder? | or | Suicide? (前書き)

初めまして。またはお久しぶりです。パラドックスです。

中途半端の、しかもプロローグだけとかいうふざけたことを（ふざけているつもりはないんですがwww）やっている作者ですが、今回だけは・・・今回だけは！中途半端にしませんww。

ということで作風もかなり変えてみました（おそらくですが）。まず題名も少し今までのものとは変えました。ついでにパラレルワールドを取り入れましたwww。

ちなみにパラレルワールドと言っても神様のなものは登場しません。魔術は信じるくせに神様はあまり信じていないのでwww（まあ実在するなら信じますがww）

ちなみにいちいち学園都市関係に説明が入ります。それも一応今までと違うところ。

とりあえず誰にでも読めるとは思いますw（何かわからないことがあったら感想に書いてください。作者がわからない場合もあります）がww矛盾しているところもご指摘いただければ幸いです）

それではとりあえず、全くとあるシリーズとは関係ないプロローグをどうぞ！

ブローグ Murder? or Suicide?

2010年12月3日、午前4時30分。

「・・・や、・・・やめる・・・！そんなことをやっても何の意味もない！貴様も分かっているだろう！」

暗闇に立ちこめた静寂を消し去ったのは、そんな叫びだった。

部屋には電気は灯っていない。ただあるのはその絶叫と足音が一つ。

その足音はただ必死に走るように荒く、不規則なものだった。

大理石の床がコツコツと、幾重もの反響を鳴らす。

部屋には暗闇でもわかるような、巨大な何かが置かれていた。その部屋の面積のほぼ半分を占めているその巨大な物体は、不気味で不快な金属音と、ゴオオオ！という轟音を鳴らせその中を走る一人の男の恐怖を限りなく無限に増大させる。

その男は今、考えていた。

その瞬間だけは、この恐ろしい運命すら忘れられるような、それほどに幸福な事実を彼は思い出していた。

家族との日々。あまりにも普通すぎる普通の生活。

自分には時間がない。

その瞬間の歓び以外にさらなる幸福はこれより先、訪れることはないだろう。

それは遙か昔に既決した宿命であるからだ。

遙か、遙か昔から既に決まっていた運命。

それは我々が『その罪』を、今この時点でも消すことは不可能だったという結果であることを示していた。

おそらく、それは未来永劫消えることはないのだろう。なぜなら、それはあまりにも残酷で、あまりにも悲しすぎる愚かな神の真似ごとだったからだ。

その巨大な悲しみは癒えることはない。許しが下されることもない。ただただ、憎しみによって全ては止まるしかないのだ。

痛みはある。恐怖もある。喉の渇きは消えず、流れる全ては止まる。

あまりにも冷たい。

その恐怖を消すことはできない。

それでも自分はその宿命から逃れることはできない。

それが宿命であるのだから当たり前なのだ。

後ろから追いかけてくるものは、何もなかった。

それなら恐怖はないはずなのだ。誰からも追いかけることはなく、何も起きないのならこの巨大な部屋の中を走り回る必要などないのだ。

自分は何かがおかしいのか？

ふと、絶叫しながら走る男は考える。

何も来ないのなら何故逃げるのか。何故自分には時間がないと、罪が消えていないと言えるのか。

わからない。

根拠などないのだ。

『あれ』を目にしてからすぐに、男は罪が消えないことを悟った。

しかし、男にはその罪すら何なのかはわからなかった。

違うのだ。根拠などその時点で存在しなかった。ただそれだけの話だ。

自分は『あの奇病』にかかったのかもしれない。いや、それ以前に自分はその奇病だったのかもしれない。一体いつからこんなことになっているのだろう。

怖い。

幸福は一瞬だった。

あとは常に恐怖が付きまとうだけだった。

根拠などない予感が、今悲鳴をあげていた。

『逃げろ！さもなければ、貴様はその冷たい大理石の床に汚らしい屍を晒すことになるぞ！』

本能ではない何かが、頻りに訴えかける。

『逃げろ！逃げろ！』、と。

テーブルの上にはワインが置かれていた。

月は陰り、光は一層微弱なものとなる。その光がそのテーブルを弱く照らした。

その暗闇の到来は、今の彼には死を意味している。

だから男は走った。

壁に当たるとも気にせず、前に走り続けた。

「やめる！！・・・こんなところで死ぬわけにはいかないんだ！私にはまだやらなければならぬことがあるんだ！」

あまりの恐怖に彼は絶叫した。

自分の体力の全てを注ぎ込んだような叫び声をあげた。

足は既に限界を迎え、体の水分は一気に干上がる。

男は走りながら自分の顔に震える手を当てた。

目は大きく見開かれ、顔中から大量の汗が噴出した。

死ぬわけにはいかないのだ。まだやり残したことがありすぎるのだ。

だが、それは無理なことだった。

これは宿命だと、自分が気づいている。その運命を打ち消すことは絶対にできないと理解してしまっている。

思わず嘔吐く。

口を急いで手で押さえて、その悶絶しそうな吐き気をおさえつける。

無理だった。

唐突に感じた。

無理だったのだ。

自分は今つづくこの世界から、消える。

「……す……べては……つ……みが……がああああ!!」

再び男は絶叫する。

そして同時にその足音は消え、大理石と何かがぶつかると鈍い音がその広い部屋の中に響き渡った。

そして瞬間は永遠となる。

静寂が訪れた。

ブローグ Murder? | or | Suicide? (後書き)

どうでしたか？

このブローグがかなり重要ですwww

これから起こる全てがここに集約されているといっても過言では・
・いやまだわかりませんwwwとりあえずここまで読んでくれた人たちはありがとうございます。

ちなみにこんな感じで会話文がほとんどない？回もありますのでよろしく願います。

夜中なので頭がぼんやりしてよくわからない文章を書いている可能性もありますが一応大丈夫だと思いますwww

あとがきやまえがきで何か変なことが書いてあったら申し訳ないです。

とりあえず、明日(今日?)は学校なので失礼させていただきます
www

追加です。

このブローグの世界は、一応自分たちが今住んでいるこの世界という設定になっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3502/>

とあるフェブルア祭と神の文書

2010年10月8日21時20分発行